

青少年アンビシャス運動フォーラム講演録

「金ではなく鉄として～私の生い立ちから～」

弁護士 中坊 公平

平成14年8月31日

電気ホール（福岡市中央区渡辺通）

それでは座らせていただいて、お話をさせていただきたいと思います。ご紹介いただきました中坊でございます。

本日は、青少年アンビシャス運動推進本部が主催されます青少年アンビシャス運動フォーラムにお招きいただきましてお話する機会を得ましたことを大変光栄に存じております。本日ご参集の方々をはじめ、福岡県民の方々が一体となって、「少年よ、大志を抱け。ボーイズ ビー アンビシャス」というクラークさんの言葉の精神に則りまして、まさにみんなが豊かな心を持って、広い視野を持って、それぞれが志を持ってたくましく生きていく、そのための青少年の育成について大変熱心な活動を展開されておられることにつきまして、心から敬意を表したいと思っております。

さて、本日の演題の「金ではなく鉄として～私の生い立ちから」という題は、主催者の方々が今言われましたように、私の著書になっています「金でなく鉄として」を読んだところ、自分たちの運動に参考になると思うのでと、このように言われてその題をつけさせていただいたわけがあります。

もっとも、アンビシャスということから想像されるような意欲あるいは志というものと異なり、私がこれから語りますことは、あるいはもっと程度の低いものかもしれませんが、私なりに精一杯、虚弱児として生まれたものがどのように生きてきたかということ、そして自分が今日現在どのような考え方をもち、どのような行動の取り方を取っているのかといったようなことに関連いたしまして、これから約1時間半ほどお話をさせていただきたいと思います。皆さんのお手元にレジュメが配付されていると思います。そのレジュメに沿ってお話を申し上げますので、お聞きいただきたいと思います。

1 朝日新聞の「金ではなく鉄として」の連載はどうしてはじまったかーイレギュラー人間

皆さんもご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、私は2000年7月24日から昨年の12月31日まで、約1年半に渡りまして朝日新聞の毎週月曜日の朝刊の家庭欄に、「金ではなく鉄として」というのを連載させていただいたわけでありまして。このような連載を書いてくれという話がどうして始まったかということでもあります。

ちょうど2000年6月中旬のことでもございました。朝日新聞の家庭部の次長さんと担当記者の方が私のところへいらっしゃいました。そして、実は今も家庭欄でこういうことを書く欄があるのだそうですけれども、それは昔からいつも小説家の方がお書きになっている欄だそうです。しかし何人も小説家が続くものですから、少し目先を変えたいと、その時に家庭部の中で話が出たのが、ここに言いますイレギュラーということでありました。

どうもこの社会はレギュラー人間が多過ぎる、少しイレギュラーな人間も探してみたらどうかということになったそうでもあります。そしてイレギュラーというので、投票されたかどうかは知りませんが、私が選ばれたということでもあります。私は改めまして、自分がイレギュラーな人間であったというふうになんか見られているのかな、ということ自分で考えたものであります。そもそもイレギュラーな人間とはどういうことを意味しているのかなと、自分で最初にご訪問を受けた時から考えました。

一般にイレギュラーという人間は、なるほど自分もそういえばそうなんですけど、どんなことに関して、世の中で人がだいたい普通お持ちの評価とか物差しというものがあるのですけれども、そこから少々ずれているということがイレギュラーなことかと思うわけでもあります。

率直に言ってそういう意味のイレギュラーという人間の方から見ますと、やはり普通の人というのに対して自分が違うというだけで不安を持つものでありますし、同時に何となく萎縮するものであります。そして世の中では弱肉強食といわれておりますように、そのようなイレギュラーな人間は、どちらかと言えば弱い肉として食べられていくものではないかと思うわけでもあります。その際に、「金でなく鉄として」のプロローグの話として載っております刃物というところの話私がいじめました。

これはちょうど私自身が小学校2~3年生頃ではなかったかと思うのですけれども、虚弱児に生まれついて、近所で子どもとけんかをして減多に勝てることがない、そういうことからいつも泣かされていたわけでもあります。その日もたまたま近所の子とけんかをしてやられていたわけですが、何かのはずみで腕か足かそれははっきり覚えていないのですけれども、どこかにかぶりついてたわけですね。そして服かなんかはあったように思いますけれども、それをさらに乗り越して相手の皮膚に私の歯が突き刺さっていて、歯で噛んでいたという記憶があります。自分で噛んだという記憶はあったのですけれども、しばらく経ちますと口の中に相手の方の血がいっぱいに溢れ出てきました。

血というものは皆さんも減多に飲まれたことはないと思いますけれども、あれは予想以上に生臭いものでありまして、飲めるものではないんです。私もあらーと思いましたけれども、口を離れたらまたやられると思った瞬間、飲むしか方法がないと思って、その血をごくごく飲み始めました。

しかし、とんでもない怪我を相手に与えました。勿論、母親からも大変叱られました。今で言

う、明らかな傷害罪に相当するわけでありませけれども、そのようなことを自分でした経験をもっております。その話を朝日新聞の方に申し上げますと、それはいいなということになって、こういう新連載を書くことになってきたわけであります。

私自身は、確かにそのような弱い子というのは弱肉強食で食べられそうなものだけれども、時には「窮鼠猫を囓む」というふうにして、いろんな生き方もまたあるものではないかというような気がするわけであります。

私はただいまご紹介いただきましたように、いくつかの大きな社会的な事件というものは処理する力があるんです。しかし、また同時に、あまり人には言っていないのですけれども、大きな欠陥もまたありました。私は弁護士でありながら、家庭事件が不得手であります。離婚事件など別れないといけない事件はひっつけているし、ひっつかないといけない事件は別れると言うし、何でこれくらい反対を自分で教えるのかなと思うほど、家庭事件すべてにあります心のひだが私には読み取れない。

そういう意味において、私は裁判にはあまり負けないが、同時に心のひだが読めないというような弁護士ではありますけれども、それなりに一人の弁護士として社会で生きていけるのではないかと、そういうふう思うわけであります。

イレギュラー人間としての考え方

「How文化からWhy文化へ」「高い理念から現場を直視」「『なぜ』こうなった、結果から原因を考える」「順次原因を追う」「担い手の意識の中に問題あり」「ヒントとは歴史と諺」ということを書きました。

私のものの考え方というのは、ここにも書きましたように、まず「なぜ」という言葉がいつも自分の頭に浮かんでくるようになってまいりました。

世の中では物事が起きますと、早速どのように対応するかということが問題になってくるものであります。日本はどちらかと言えばHow文化であります。何らかの対応策をちゃんと考えて、それを実行する。勉強しなければ勉強するようとか、すべて何かの対策を練ることがまずもって要求されるところであります。

しかし率直に申し上げまして、私自身はいかに対応しようにも自分がちゃんと対応できないということを知っているものであります。対応してはいつも人に遅れる、また人のように十分できない。そういうことから、そういうことが起きても「なぜこうなったんだろう」ということを自問自答する癖がついてきたと思っております。「なぜ」ということこそが、つまり世の中で学ぶということは「なぜだ」と思うことではないかという気がしているわけであります。

世の中のあらゆる現象はすべて何らかの結果であります。原因のない結果はないのであります。現象面に出ているいろんなものごと、いろんなことはすべて原因結果であります。これには必ず原因がある。その原因はなぜかと考えると、その原因が浮かび上がってくる。その原因もよく考えてみると、また何らかの結果である。そうするとまた原因は何であるかというようなことを順次考えていくということが私の癖にもなっておりますし、それは必要なことではないかと私は思っております。

そして私もいろんな物事に対応してきましたけれども、世の中でそういう意味において根

本的な原因は、大概是組織であるとか制度であるとか運用というものに欠陥があって、それがためにこうなったというような結論が多いように見受けられますけれども、私は実はそうではなしに、どんどん遡っていけば実は担い手自身の中にある、私たち一人ひとりの中にあった。実は誰が悪いわけでもなくて自分が悪かった、担い手が悪かった。担い手のどこが悪いかと言えば、意識の中にあった、ということにだいたい到達するものであります。その意識の改革から物事を考えない限り、物事というものは結果において解決しないのではないかと。

そういう場合は、まさに「なぜ、なぜ」と考えていきますときには、そもそもどうしたらうまくいくかという小さい視点ではなしに、まずもって高い理念から、本当の意味で人類の幸福とは何かといったような、そういう日本国民だけではなしに人類のそもそもの幸福とは何か、そして現場を片一方で直視して、まさに現場に神宿るでありまして、なぜこうなったのかということを考える。そう考える中において次第に原因がわかってくる。高い視点と現場の直視という中から「なぜ」と考える、こういうことになってくる。

ヒントは歴史と諺とであります。それを知ってますと、だいたいそんなにあまり勉強を知らなくてもできるのではないかとというふうに思っております。そういうことによって私は原因というものを、本質的な原因を考えて、その本質的な原因を除去することを始めなければいけないのではないかと。これが私の基本的な、ある意味でイレギュラー人間としての考え方ではないかと思っております。

続きまして、その次に、それではどこから行動を起こすのか、「イレギュラー人間の行動の仕方ー着手先行型を排して理念先行型へ」と書きました。原因はわかった、その本質的な原因を除去しようというのはわかる、それではどこから除去を始めますかということでありまして。

世の中では一般に、先ほどのHow文化とまた同じでありまして、なるべくやれるところからやろうということが多くいわけでありまして。そしてそれを素早く着手される方を現実的な人と言ひ、いろいろ意見があればその真中を足してやるということをやの方を人格円満な指導者だと世の中に言われているわけでありまして。

しかし私は何となくその方向付けが、できるところからやろうというのが間違いであって、まずもって根本的な原因を除去しなければいけないという、理念に基づく本質的な原因を除去しようという目的がないといけない。そうするとその目的を実現するために何が必要か、そのために何が必要かというふうに考えていかないといけないのだと。まずできることからやっといこうというのではおかしいのではないかと思っているわけでありまして。

改良の先に改革はないと私は思っております。世の中の人は何となくできることからやっ、そして改良を重ねていけば、いつの間にか知らないけれども根本的な改革が可能だとお考えの方も多いように思うのですけれども、私は必ずしもそうは思わない。私は改良の先に改革はないと思っております。改良というのはどちらかといえばお互いに気なぐさめるやり方でありまして、「よう頑張ったな」「あんたもようやったな、よう頑張ったな」とお互いになぐさめあうためのことでありまして、改良というものが続いていったらどこかで大きな渾みたいな崖っぷちがありまして、そこから向こうは飛び越せないことになっているわけでありまして。物事を本当に見て成し遂げようというなら、逆に渾みのある向こう側からこちらの

方へ向かって、どういう道しるべがあるのかということを考えて、その上に立って、ここにもいう戦略、戦術が考えられなければいけない。

ここにも書きましたように、まずもって準備、物事は思いつきだけではいけない。そして1人ではできないから仲間が要る。そして見取り図も作らないとわからない。時には公約もしないといけないし、見通しの無いまま実践へも移さないといけない。そしてその上に立っての戦術というものが出てくるものでありまして、現地の指揮官は自ら退路を断つということが必要でありましょうし、そして同時に、部下の肩車に乗っていつてはならない。しかも柔軟でありまして、逆風下には間切（まぎ）る。

これはちょっとわかりにくい言葉なのでちょっと説明いたしますと、着手先行型と一見すると似ているところがあるのですけれども、実は本質的に違うという意味で申し上げたいと思います。皆さん方は、ここは福岡県ですから海に出られた方もいらっしゃるかもしれませんが、間切るという言葉をご存知の方はいらっしゃるでしょうか。漁師さんですとご存知の方も多いのですけれども、いらっしゃるでしょうか。

間切るというのは、漁師さんが昔の帆船、私は若い時分にヨットを操縦しておりまして、ヨットを操縦するときに覚えた言葉です。間切ると言いますのは、理念先行型にせよ、到達しなければいけない目標がここにあるというときに、世の中というのは順風が吹いておって、「追手に帆かけてピュラピュッピュ」というふうにお尻から風が吹いてきているときは、船は帆さえかけておれば目的地に向かいます。

ところが世の中というのは、得てしてそういう方向へ自分がちゃんと舵を向けましても、まったくの逆風、到達しようという目的のところから逆に風が吹いてくるということも実は多いわけでありまして。逆風というのは常に世の中にあるものです。みんながやればみんなが賛成してくれるということよりも、むしろやればやるだけ逆風が吹いてくる。そういう場合に自分の方が正しいからここをまっすぐやれば良いかということ、実は決してそうではないのであります。

そういう場合に真正面から風が来ていて、しかもそこに風の力だけを受けて目標に到達するためにはどうするかと言いますと、結局自分の船を、この目標はここにありながら、違うところに風だけ受けて、はすかいに走っていくわけです。目標はここにあるのに違う方向に向けて走っているわけです。そして一定の限界まで行きますと、今度はまさにUターンであります。今度は正反対にこちらの方へ向けて、そしてまたジグザグで帆を向けて目標にいたるものであります。

「君子豹変」という言葉があります。これは着手先行型と、先ほど言うようにできることからやるというのと似ているじゃないかとおっしゃるかもしれませんが、実は大いに違うわけでありまして。ここへ到達しなければいけないということはわかっているけれども、逆風下の下においては一旦はここへやってくるけれども、いずれ自分は必ず一定の限界まで来たときにもう1回操縦を変えて、方角を変えます、そしてこう向いて行きますということを見越した上でやっていくことが必要なものであります。

そういう意味においては一見して着手先行型と似ているようですが、こちらは進行するときから方角が違うということがわかってそれをやっているのです、そしてまた一定の限

界まで来ればまったく正反対のことをしますということを胸に秘めながらそういうことをやっていくのが実は正しいのではないか、このような気がいたしているのであります。

私はいろんな物事をやりますときにも、常にここに書きましたような戦略、戦術を考えて実はやってきたものであります。本日はどちらかと言えば、そういう結論よりもこのようなものの考え方、青少年の育成という立場から、そういうようなものの考え方というのはどのような生い立ちの中で生まれてきたものであるかということ、**「虚弱児の生き方（その1～その4）」**まで、これから順次お話を申し上げていきたいと思っております。

2 虚弱児の生き方(その1)―鉄の育て方

私は1929（昭和4）年に京都で弁護士をしておりました中坊忠治と富の次男として出生いたしました。先ほどから申し上げておりますように、私は生まれたときから大変な虚弱児に生まれついていたようです。私はいまだに左手でご飯を食べているのですけれども、それも母親に聞きますと、小児科のお医者さんが、「こんなに体の弱いのに、左手でご飯を食べているのを無理に右手に直したら、それだけでこの子は死んでしまいますよ」と言われて、左手のままご飯を食べさせていたようです。字も小学校4年生くらいからやっと左から右手で書けるようになりましたけれども、やはりいまだにミミズが違ったような字しか書けないということでもあります。

しかも私は生まれた時から強度の近眼に生まれております。0.1以下という視力でありまして、小さな字はほとんど見えませんし、小学校1年生になりましても黒板の字が読めないほどひどい近眼に生まれついてしまいました。その上、手先も大変な不器用、そして運動神経もだめということでありまして、寝小便も16歳まで垂れるというありさまであります。

学校の先生がおっしゃるのですが、私の悪さというか欠陥は、要するにすべてが大雑把だと言われるんですね。2+2は4ですし、3+3は6ですけれども、「中坊君、4か6が正しいのだけれども、君は5とか3とか近いところだったら堪忍しといていなというものの考え方をしている。しかし、やはり4は4で、6は6でないとかあかんのや。だから中坊君、そこが君は算術もあかん」と言われますし、「珍」という字がありますが、あれはノを3つ書かないといけません、**「中坊君の字はノがいつも2つしか書いていない。2つしか書いていないのでは漢字としては間違いなんだ」と**。

そういうところが私の悪いところでもあります。わかっておっても、それがなんぼしても直らないということになっているわけです。今の学校で言ういわゆる落ちこぼれ組というのに所属をしていたわけでもあります。

しかしながら、私の家はかなり裕福な家でありまして、私付きの女中さんがおるようなかなり裕福な家に生まれておりました。学校の勉強はできないけれども、何となくうまいこといくやろうとどこかで思っていたと思うのですけれども、1942（昭和17）年に私は旧制中学の入学試験を初めて受けます。あのときは戦争中でありまして、第二次世界大戦が始まった直後であります。子どもを全部公立の中学校に入れるというのが第一でありました。4人のうち3人までが受かるというほど安易に受かることになっていました。しかし私は、不幸にして4人のうちの1人に入ったわけでもあります。いわゆる落第をしたわけです。そしてみんなが公立の中学校に行くのに、私は私立の中学校に私1人が通わないといけないというふうになったわけでもあります。

このような中におきまして、私はその後大学に行きましても、正月になりますと母親が「公平さんには1枚も年賀状が来ないね」と言われるような孤独な学生として大きくなってきたわけです。まさに私自身は自分を省みましても、ここにも書きましたように、「虚弱児に生まれて一孤独と劣等感」と書きました。まずもって私は友達というのがありませんでした。先ほど言いましたように近所の子どもにも遊んでもらえない子どもでもありました。

孤独というのはそもそも何なのかというのを自分なりに考えますと、結局は孤独というのはどうしようもない自分と対峙することではないかという気がいたしております。そして一般に孤独ということは決して良いことではありません。むしろ非常に悪いことではないかと思っております。どこが孤独になると悪いかと言いますと、自分がどこに位置していて、どのような方向に向かってどのようなスピードで歩いているか、走っているか、このような位置も方向もスピードもわからないということになっています。

私も弁護士会の日本弁護士連合会長等いろんな役職を重ねてきました。弁護士の中にも不祥事を起こす人も多いわけでありまして。そういう人たちの過去の姿を見てみますと、みんな一旦、孤独になっております。孤独になりますと、弁護士も自由業でありますからなんらかの組織の中にいない。そうすると必然的に自分の位置がわからなくなってくる。自分が外れているということがわかってこなくて、スピードも方向もわからないということになってくるわけでありまして。

そういう意味では、船が灯台を見て走るのと同じように、仲間というものがあってこそ初めて自分の位置も方向もスピードもわかる。あの人はあっち向いてはるなあ、こっち向いてはるなあということがわかって、初めて自分のわかるものであります。そういう意味では非常に孤独ということは良いものではないわけでありまして。

しかし、それではそういう孤独に陥ってしまったものは何もかもマイナスかというのを私も考えてみますと、2つくらい良いこともあったという気がしております。私は先ほど言いましたように、中学校から高校の試験もすべっていますので、約8年間ほど本当に孤独な学生として暮らしてきました。そして集団から外れて自分一人が生きてきたことを覚えております。

そうしますと集団から離れてわかりましたことは、ほんまもん和嘘もんの区別がつくということでありまして。だいたい言っても、「これはほんまもんやな」「これは嘘もんやな」というのは、集団から離れて世の中を見てみますと、言葉のあやとか人の表情とか何かにはほんまもん和嘘もんの区別がつく。これが私にとっては孤独であったことの大きな利点ではなかったかと思っております。

2つ目には、私たちがそういう意味で仲間から外されるということは非常に嫌なものであります。しかも日本の社会というのは大きく問題がありまして、むしろ妬みとひがみで世の中は動いていると思うくらい、人を上げたり下げたり、極端に強いものであります。そして二言目には仲間はずれをすることでもって大変な武器に使うものであります。

そうしますと、私たちは今度は逆に孤独になったら具合が悪いものですから、そしてまた仲間外れをされるということの恐ろしさから、本当は仲間外れされていなくても、なりそうだとことだけで、うろたえるという状態になります。

私自身も何かのことをしましていろいろ週刊誌等にかかれたこともあります。そのようにいろいろ人に非難中傷を受けるということも多々ありました。しかし、その時にも私自身は、「もし

みんなから集団から外されたら昔のあの状態に戻るのやな」と思いさえすれば、うろたえなくなつたと思っているわけであります。まさにそういう意味において、孤独ということは必要な側面もあったのではないかと考えているわけであります。

同時に、劣等感ということを書きました。そのように虚弱児に生まれますと、何をしてもうまくできないということから必然的に劣等感というものが自分の体に染み付いてまいります。劣等感というのは、私はこれもまた非常に良いものではないと思っております。

劣等感がなぜそれほど悪いかと言いますと、実は不安感というものが必然的に付いてくるものであります。要するに何かわからないけれども不安が非常に胸をよぎります。頭をよぎります。そうしますと私は、肉体に過労がいけないのと同じように、神経の過労が私は不安ではないかと思うのであります。自分の神経を嫌というほど痛めつけるわけであります。

そういうふうには不安感が常につきまといまいますと、物事すべてに悲観と臆病が付きまといまいます。何でもうまいこといくということが頭に描かれない。何でも失敗するというふうに見えるようになるし、ちょっとやれば「失敗するのではないか」と頭に来るから、臆病になってきます。このように不安感というのは必然的に臆病という悲観が付きまといまってくるものであります。

しかし、私も世の中を大きくこうして長い間生き抜いてまいりますと、世の中ではすでに、例えば冷戦時代であれば右か左かという択一のことでありまして、今の小泉内閣も構造改革か景気回復かと二者選択を強いられているようですけれども、私は世の中というのは右を行ったら正しくて左に行ったら間違いと、右左さえ選べば正解が得られるほど世の中というものは単純なものではありません。いわゆる構造改革だって景気回復なんです。実は一見して相矛盾しているように見えても、そういうものが世の中にはあるわけであります。重層的に世の中というのは重なり合っていて、相矛盾したものが重なり合っている中でどう我々は生きていくかということであります。どんなことをしても作用と副作用は付きまとうものであります。右を行けば全部正解で、左を行けばみんな間違いというような単純なことは世の中は現実には割り切れないと思えます。

そうすると重層的に層をなしてもものを考えないといけないうきに、一番下地の絵をどちらの絵で描きますかというのは極めて重要ではないかと思うわけですが、私は間違いなく、下地はまさに悲観と臆病、いわば絵に描く一番下地は灰色の絵で描かれていて、その上に黄色とか緑とか赤とかいう色を付けていくべきものではないかと思えます。それが逆に最初から希望に燃え立ってとかいうようなことでやるということは、必ずと言っていいくらい失敗するものであります。世の中というのはまずもって悲観であり、臆病であり、不安であると。その上に立って物事を考えるべきものではないかと考えるわけであります。

そのように、私は虚弱児に生まれて孤独と劣等感が必然的に付きまといまいました。そこから生まれましたこのような考え方もまた必要なことではないかというふうに考えているものであります。

続きまして、「金メッキせず」と書きました。これは本にも書いてきましたように、私の小学校3年生くらいのときですけれども、大きくなって私の小学校の先生が教えてくれたことです。

私は先ほど申し上げましたように、大変に学校の成績の悪い子どもであったわけです。ところが、父親は後に弁護士をしておりましたけれども、もとは小学校の先生をしておりました。母親もまた小学校の先生をして、しかも1~2年やるのではなく10数年、ともに小学校の先生であっ

たわけです。ところが小学校の先生の子が私のように成績が悪いわけでありませう。

ある日、私の担任の先生が私の父を教員室に呼ばれたようでありませう。そして、その先生が私の父親に対して、「中坊さん、あなたのご子息である公平君があれほど成績が悪い。考えてみたら、あなた達のご両親とも小学校の先生ではありませんか。そしたら学校だけではなしに、家でもちっとは勉強を教えてくれはたらどうですか。そしたらあなたのお子さんでも人並みには成績が取れるようになるかもしれない。いっぺん、ご両親として努力をしてください」ということを私の父親に言っていたそうである。

その時の父親の返事が、ここにある「金メッキせず」でありませう。私の父親が小学校の先生に申し上げたようでありませう。

「なるほど、あんたが言わはるようにはうちの公平は生まれながらにして、残念ながら金ではなく鉄だったのだろう。わしもそれは認めざるを得ない。しかし、わしも長い間小学校の先生をして、こうして社会人になった親として考えてみると、うちの子は確かに鉄や。しかし、この鉄に今、親が無理に勉強を教えるということは、結局鉄に金メッキを施しているに過ぎない。なるほど勉強を教えたら一見して普通の子並にできるやろう。しかしそれは所詮、メッキを施しているに過ぎないんだ。そのメッキは長い人生の中で必ず剥げてくることある。この子にとって、そのメッキが剥げるときこそが実は問題なんだ。それくらいなら、生まれた時から自分は残念ながら鉄だったということがわかって、鉄としてどう生きていくのかということはこの子に教えさせることの方がいいんだ。だからあんたは安んじて、(あの時分の通知簿は甲乙丙でできていたのですけれども)うちの公平には安んじて丙を付けてくれたらいい」、このように言ったそうである。そういうことである。

このように「金メッキせず」ということで育てるならば、「安堵感こそが原点」、そして「意欲」ということを書きました。それでは鉄としてどう育てるかということではなかろうかと思うのでありませう。鉄としてどう育てるか。

私は今思い返してみても、先ほど言いましたように社会の判定を初めて受けましたのが旧制中学の入学試験に落第したときでありませう。昭和 17 年の 3 月頃でしょう。みんながおおかた受かるものですから、その年に自分も何となく受かるだろうと合格発表を自分で見に行ったわけでありませう。そして自分の名前だけがないことを知って、泣いて家に帰ってきたことを覚えておられます。

私の父は生涯、妙な癖がありまして、「果報は寝て待て」という話がありますが、私の父はなぜかそれをまともにもいつも信じておられて、私に限らずきょうだいの入学試験の発表というときには、いつもわざわざ布団を敷いて朝から寝ているわけである。

それで私が試験にすべりました日も、朝から私が昼前に合格発表で帰ってくるまで、父親は布団を敷いて寝ておられました。その寝ているところへ私が泣いて帰ってきて、すべったということを告げたことを覚えておられますが、そのときも私の父親は布団の中で私を抱いて、「何も心配せんでええ」というふうに言ってくれました。

同時に、母親はそばから「公平さん、入学試験にすべったのはあんたが悪いんとは違ふ。世の中が悪いんだ」と。これもええ論法でありませう、「あんたは生まれついて昔から体操も下手や。ところが今は戦争中で、今は科目に武道まで付いてくる。だからますますもってあんたは成績が

悪くなってきて、こんなことになるねん。もうすぐ戦争が終わって平和な時が来たら、あんたみたいな子でも必ず世の中生きていけるから、今だけが悪いんだ」というふうに母親が言ってくれたことを覚えております。

私は私立の中学校に通いました。2年生の1学期の中間試験で、私は試験の細長い紙を担当の先生がくれるので、その細長い紙の一番下を見たら1と書いてあるんですね。1というのは何という意味かいなと思って、「先生、この1というのは何ですか」と尋ねたら、クラスには50人くらいいたのですけれども、「中坊君、君はクラスの中で1番だ」と言われて、私は生まれて初めて1番という点数をもらいまして、うわーっと思って早速家に帰って、「おかあちゃん、僕1番や」と言ってその細い紙を見せました。

そのときに母親が言いましたことは、「公平さん、実はあんたは天才やったんや」と言うんですね。天才というのは突然生まれてくるのだそうできて、「わし天才やったんか」と。だったら昨日の俺と今日の俺とどこが違ってるのかなと思うのですけれども、全然変わっていないのに天才だと言われまして、俺もおかしな人間になったなと思っていました。

そして早くも1学期の期末試験がありますと、50人の中の25番に下がりがまして、私は早速家に帰りまして、「お母ちゃん、やっぱりあかんわ。25番や」と言いました。そしたら母親が言いましたことは、「何を言ってるの、中庸は徳のいたすところと言って真ん中へんが一番ええのや」と言うんですね。

考えてみれば私は、1番になれば天才になり、25番になればそれで良くて、試験をすれば世の中が悪いと、何を言っても良いということになります。私は小便を16歳まで垂れ続けました。しかし今思い返して見ると、ただの1回でも母親に寝小便を垂れたらいかんと怒られたことはありません。「お母ちゃん、またお布団が冷とうなった」とさえ言えば、夜中のどんなときにあっても布団のカバーを替えてくれて、暖かい新しい布団に替えてくれたことを覚えております。

私はまずもってこのような虚弱児に生まれついて、イレギュラーとして世の中の物差しで測れない人間として生まれてきた。それに対してどう対応していくのかというのは、やはり絶対的に誰かが受け入れてやるよということを示してやる必要があるではなかったか。

そう思い返しますと、実は私の母親は、私が子ども心に覚えているのに「かなりや」の歌というのを歌ってくれました。「歌を忘れたかなりやは」という歌です。裏の小藪に捨ててもいけない、柳の小枝で打ってもいけない、「歌を忘れたかなりやは象牙の船に銀の櫂、月夜の海に浮かべれば忘れた歌を思い出す」という歌詞でありました。

私は昭和51年に母親が亡くなりました年、たまたま亡くなる数日前に母親の前でなぜかナリヤの歌を聴かせたことがありました。母親が「公平さんはこんなに小さな時の歌をよう覚えてるな」と言って喜んでくれたことを覚えております。おそらく母親は、そのような歌を忘れた子は象牙の船に金の櫂、月夜の海に浮かべてやることこそが重要ではないかと思っておったのではないかと思うわけであります。

私はこのような両親のもとにありまして、初めて私には安堵感というものがありました。安堵感があって不安感から免れてくる、そしてそこによって初めて意欲というものが出てまいります。その意欲にある自分の本能、先ほど言いましたように自分の歯は実は刃物だったということもそのときに気づくわけであります。いろんな本能を自分が持っているということも気が付くわけで

あります。

私も大学の試験に受かっておりますし、司法試験も受かっております。しかしそのときになりますと、フランス語は人に教えてもらおうとか、あるいは私はヤマをかけるのがとても上手になりまして、何でもヤマをかける。

司法試験でもヤマをかけるんですね。私は教科書を読むときから山形のヤツを大ヤマとか小ヤマとか書く。父親が「公平、これは何や」、「これか。大ヤマと中ヤマと小ヤマや」と。そしてら親父が私の教科書を見て、「公平、何も書いてないところがいっぱいあるやないか」「ああ、こんなところは出えへんのや」「出たらどうすんのや」「なら、すべるがな」というわけで、現にうまいこと当たると司法試験も受かることになるわけでありまして。私は先ほどから言いますように、例えば住専処理の後始末の会社の社長もいたしておりました。全部で1兆7000億円という債権を回収してきましたから、何百億とか何十億という数字を会社で決裁しなければいけません。それこそ何十、何百という決裁をしなければいけない。算術もできないのにどうしてそんな会社の社長が務まりましたかということになってくるわけです。

私は実は算術ができません。特に算術の苦手なのは、下から上で上がってくるやつがありますね。1つ上に足さないといけない。それを忘れてしまうんですね、上がるときに。そんな数字が5つも7つも並んでいたら、絶対に上までいったら間違っているわけです。私は足し算ですら、いわんや引き算やかけ算はダメですけれども、足し算もなかなかできないということを私は自分で知っております。

そのような私が社長になってどういう計算方法をやるかということ、一番上の数字だけを足すんです。例えば9と7と書いてあったら16と。後ろの継ぎ目の数字を見て、9とか7とか書いてあったら、時には1つとか2つくらい足して、大体これくらいの数字だという一番上のところだけを覚えるわけです。すると存外、その辺で間違ってきているやつがいるわけです。すると、「おい、この数字おかしいのとちゃうか」と言えるでしょう。するとみんなは、私は算術ができないといつも言っているものですから、「社長、算術できますじゃないですか」「そら社長やもん、できるがな」と言っておりますけれども、本当はわかっていないんです。

そういうあまり人にはない計算方法ですけれども、そういう計算方法を自分で作ってやることになるわけです。ヤマをかけたり、そういう算術はおそらくないでしょうけれども、そういう仕方を覚えて社長が務まるという能力がついてくる。

私はこの年になって初めて思いますことは、能力というものは決して親から与えてもらうものではないと私は思うようになりました。同時に、学校で学んで能力が付くものでもないと思っています。能力というのはまさに自分で作るものであります。私は誰におかしな計算の仕方を教えてもらったわけではありません。しかしながら、自分で能力というものを作っていけるものではないかと考えているものであります。

同時に、「しあわせは心の中に一このことを悟った18歳の記憶」ということを書きました。今度はかなり大きくなりまして1947(昭和22)年、私が18歳頃になったころでありました。その時分は旧制中学も旧制高校もすべった時代のころであります。まだ戦後でありまして、物資のない時代でありました。私たちも両親とも田舎に帰って農業をしていたわけでありまして。

農業をいたしておりましたある秋の夕暮れでした。ある日、その日の農作業を終えて私も父親

と一緒に田舎道を帰ってまいりました。自分たちは自分の家の前に来て、当然のように止まります。止まっていた目の前を農家の一家が立ち去っていく後ろ姿が見えたわけです。

そうしますと父親が何を思ったのか突然、その後ろ姿をじっと見ておりまして、「公平、幸せというのはこんなものかな」と言うんです。えっと思って、私もその時分、何が一番大切かな、幸福という言葉が一番欲しいなと思っていました。そうするとその思っていた、渴望している幸せということ、立ち去っていく農家の後ろ姿に父親が「幸せというのはこんなものかな」と言うんです。

立ち去っていく農家の後ろ姿なんてどこにでもある農家の後ろ姿でありました。リヤカーの前をお父さんが引き、荷台の上にはその日の収穫と子どもが載っており、リヤカーの後ろをお母さんが押して、お父さんの横に子どもからすればおじいちゃんが鍬を担いで歩いている、どこにでもある農家の姿です。

その農家の後ろ姿を見て父親が、「幸せというのはこんなものかな」と言った意味ですが、先ほど言いますように、私は何か (How) ではなく、なぜか (Why) ということ、子どものことから次第にどんなことでも、なぜだろうと考えておりましたので、父親はなぜこの後ろ姿に幸せというものがあると思うのかということ、私としても不思議に思いました。私なりに考えてみたのであります。

そうしたときに、おそらく1週間も経たないうちに、ふっと気が付きましたのは、これも母親が常に歌ってくれた歌であります。カール・ブッセという人の詩があります。皆さんもご承知の方もあると思いますが、「山のあなたの空遠く『幸(さいわい)』住むと人のいふ。噫(ああ)、われひとと尋(と)めゆきて、涙さしぐみ、かへりきぬ。山のあなたになほ遠く『幸』住むと人のいふ。」という歌です。

この歌も今度はカナリヤの歌と違って節のない歌です。その節のない歌をなぜか母親が子ども心に覚えるまでにこの歌を歌い続けていたことを覚えています。そのカール・ブッセの詩と、父親の言う「幸せというのはこんなものか」というのが、自分でなぜかと考えているときにある日突然に、そうかと思って考えついたのは、「しあわせは外的条件とは関係ない」、「しあわせは自分の心でどのようにもつくれる」ということです。「知足最富」ということを書きました。私は母親が言っているカール・ブッセの詩の意味と父親の言葉はなぜかというのがはっとわかったような気がしているわけです。

要するに、我々にとっておそらく幸福という言葉ほど最高の価値判断の基準はないと思うのですけれども、一人ひとりの幸せというものを私たちはともすれば外的条件に追い求めてはいないでしょうか。お金であるとか、あるいは権力であるとか、地位であるとか名誉であるとか。私をして言わしめれば健康というのが外的条件なんです。自分たちの幸せがそのような外的条件にかかわらしめているとすれば、やはりカール・ブッセの詩のように、「山のあなたの空遠く『幸』住むと人のいふ。」ということでもあります。自分が訪ねて外的条件に追い求めていったって、結局得られはしません。得てもこんなもんかと思うということでもあります。

カール・ブッセの詩が、ドイツの詩人の歌が日本語に訳されてこれほど世界中に長く言い伝えられていくというのは、何か意味があった。それは結局、「山のあなたになほ遠く『幸』住むと人のいふ。」ということ、詩は終わっておりますけれども、おそらくこれが言いたいことは、そ

うではない、人の幸せというものはそんなものではない、あなたの内的な条件、すなわち自分の心の中にあるのではないかということではないかと思うのであります。

「金でなく鉄として」という本の中にもその時々私の写真が載っておりますが、私の一番人気の良い写真は、東京駅の新幹線の中でシュウマイ弁当を食べているときの写真が一番人気がいいのだそうです。

シュウマイ弁当というのは710円で安いんです。安いだけではなしに、皆さんはそんなことはないかもしれませんが、私は妙な規則を自分で作ってまして、八重洲口でシュウマイ弁当を地下で買うわけですから、当然のように新幹線に乗ってきます。しかし私は何となく、駅弁は汽車が止まっている間は食べてはいけないという規則を勝手に作っているんです。だから私はなぜか汽車が止まっている間は駅弁が食べられないわけです。そしてやっとなんとか動き出して、「食べれる」と思いますと、その瞬間、本当に私は幸せになれるんです。それも5階建てくらいの幸せではなくて、20階建てくらいの幸せにピョンとなるんです。

今日もちょっと早く寄せてもらいまして、お昼ご飯に下でラーメンを食べさせてもらったら本当に野菜ラーメンがうまかった。そうすると私はほんまに幸せで、「幸せになったらウトウトと寝るかもしれません」と言ったら、ほんまに寝とったらしいです。そういうふうに瞬間的に人間というものは幸せになるものだなということがわかります。

そうしますと自分で勝手にそんな規則を作って、自分で喜んでいるわけでしょう。そうすると私は幸せというのは、実はそういう外的条件ではなしに自分の心の中にある。別の言い方をすれば、日に何回でも、ラーメンを食べては幸せになり、駅弁を食べても幸せになり、食うことばかりで失礼ですけども、とにかくそれくらい幸せなんて1日に何回でも来る。

私なりに考えてみますと、幸せは心の中にあるということは、別の言い方をすると幸せの枠というのが心の中にどのようなにも作れるわけです。三角形であろうが四角であろうが、大きな幸せであろうが小さな幸せであろうが、幸せの枠は自分でどのようなにも作れる。そしてその幸せを感じるものが幸せであって、決して外的条件ではないのではないか。

仏教の言葉でいいます「知足最富」、足るを知ることが最も富んでいることであるという言葉の意味は、実はこういうことではないかという気がしているわけでありまして。

結婚のところは簡単にいたしますが、私は1959年の30歳になる年の2月に結婚しました。その前の年に私はお見合いをいたしまして、今の嫁さんと一緒になったわけですけども、私は「夫婦愛は戦友愛」という、弱い者同士の結婚ということを書きました。

お見合いをして結婚をするときから嫁さんに、これは嫁さんには大変に人気の悪い言葉でしたけれども、夫婦愛というのは戦友愛だと言ってました。私は何しろ戦争中に育っていますからそういう言葉が自動的に出てくるのかもしれませんが、露営の歌というのがあって、「1本のたばこを2人で分けて飲み」とか「着いた手紙を見せ合うて」とかありました。私は長い人生の中で夫婦というのは戦友みたいなものだ、どんなことがあってもいつもそばにいてくれて、そしてやっている中に喜びも悲しみも苦しみも共にあってこそ初めて夫婦ではなからうかと思うわけでありまして。

私は今でも正直言って同じ布団に、大きな布団を作りまして、1つの布団に寝、お風呂も必ず2人で入るというようにしておりました。そのように何でもかんでもやっていたら、やはりそう

いうものが出てくる。

私は先ほど言いましたように、戦略、戦術の中に仲間が要るということを言いました。おそらく長い人生というのを歩むのにも仲間が要ります。仲間もいろんなやつがいると思いますけれども、一番要るのがペアを組む人です。そしてパートナー、それからサポーター、いろんな人が支持してくれないと、自分の仲間ではできないわけでありまして。その中でも確たるものがペアではないかと思うのであります。まさにペアというもののほど重要なことは人生においてないと思うのですけれども、そのペアそのものが夫婦ではないかと思うのであります。そういうものがあってこそ初めて、夫婦というものがお互いに代わりをしたり、補完をしたり忠告をしたりして、初めて人生も歩んでいけるのではないかと。

そうしますと仲間というものになる、まずもってペア、その中の核である夫婦というのは、ペアというものは、仲間すべてが同じ事でありましてけれども、仲間とは一体どういう人たちを指すのかということでありまして。

私は少なくとも価値観を共通にし、感性を共にすることではないかと思っております。価値観というのは人によっていろいろ違います。価値観が同じであって感性が同じであるということが必要であろう。そうすると私は、自分が結婚しますときから、私の嫁さんも大変弱い嫁さんなんです。自分が弱ければ強い者をもったら補うということをよく言いますが、それはむしろあかんのでありまして、弱い者同士が一緒になる、そうすれば価値観も感性も基本的に一緒ではないかという気がするわけでありまして。

私自身は実はお見合い、しかも第1回目のお見合いをして今の嫁さんと一緒になりました。すると父親は、「なんでわざわざよりによって弱そうな嫁さんとお前は結婚するのだ」と反対します。私もその当時は一応大学も出ておりまして司法試験も合格し、弁護士にもなっていたわけでありまして、もうちょっと元気そうな嫁さんを探せと言われる。そのときに私は、「親が子を見間違ふこともあるな」と思いました。

どういうことかといいますと、私の親は私が虚弱児で、金でなく鉄としてということであれほどよく知っていた父親であり母親であるはずで、しかし私が試験に受かってシューッといきますと、やはり親というのは親馬鹿でありまして、親は子どもをいように思うんですね。うちの子が何か賢くなったみたいに思う。しかし、絶対賢くなってもいないのに、親だけはそういうふうに思いがちであります。だからこれは、「ああ、わしのお父ちゃん、お母ちゃんもあかん」と。

同時に、私も両親との経済上の決別を初めとしまして、初めてこのときになって、要するに雛が巣立つのと同じように、いつまでも両親の手元には自分はいられない。結婚を境にあらゆる意味で、つまらないことですが、私は家内のことはもとより、孫のものといえども、おもちやといえども両方とも両親からいかなるものももらわない。家を建てるのにも10円の援助も受けない、掛け軸の1本ももらわないというようにいたしておったわけです。

そのような父親でありますけれども、結局、昭和51年に父親が死にます年の1ヶ月ほど前に、私の妻の父親が、その方も今は亡くなっていますけれども、新潟から私の父親を病棟に見舞ってくれました。そして帰ってきて私の家で家内の父親が泣いておるんです。

私は、私の父親が衰えた姿を見て、中坊さんのお父さんもこんなに衰えはったかと思って泣い

てくれているのかと思ったら、そのお父さんが言うには、「公平さん、実は私は今日は悲し涙ではないんです。嬉し涙なんです。実は今日、病室へ行ったら、あんたのお父さんが、あんたの淳子はうちの公平にとっては日本一の嫁でしたと言ってくれた。私は新潟から自分の子どもをあんたの家に嫁がせて、遠い所へ行って、しかも両親がなんとなく反対であるということはよくわかっていました。それだけに自分の娘がどうしているのかということに心配しない日は1日もなかった。そして今日やっとあんたのお父さんから日本一の嫁でしたということを知って、これくらい人生で嬉しいことはなかった」と喜んでいたのを覚えているわけであります。

3 虚弱児の生き方(その2)ー現場主義

さて、その次には「虚弱児の生き方(その2)」であります。現場主義ということであります。今度は一転しまして、具体的な生き方について虚弱児なりのものの見方、考え方について触れてみたいと思います。

今度は話が少しかわりますが、先ほどと同じ1959年の2月に結婚しまして、4月に弁護士として独立をします。ちょうど30歳になる年に独立したわけです。ところが独立をして初めてわかりました。要するにその年の年末になりますと、預金通帳を調べて預り金がありますから、それを順番に引いていったわけです。お客さんのお金を預かっているわけですから、するとその預金通帳の残高は合ったのだけれども、引こうと思ってもしまいには引けなくなってくるんです。それであつと気がついたら、結局、依頼者のお金を自分が使いこんでいるわけです。この瞬間が今言う横領罪です。私はずいぶん傷害罪とか横領罪とか罪名を重ねておりますけれども、初めて自分が人の金を使い込んでいるというのがわかったときに、本当にきゅーっと坂から飛び降りるような気がしまして、やっぱり俺はかなわんなというのがわかりました。

と言いますのが、私はそれまで「孤独だって悪いところと良いところがあるがな」くらいに思って、わしでも何とか生きていけると思っていました。しかし弁護士という商売は、人から人と紹介を受けて初めて成り立つ商売なんです。ところが私は友達がないものですから、私を紹介してくれる人がないわけです。かといって弁護士という商売は、「弁護士いらんか」と売りにいくわけにもいかない。するとはたと困りまして、孤独でも大丈夫だ、プラス面とマイナス面があるがなと思っていたのですけれども、依頼者が来ないとなるとどうしても生きていけない。

そんな時に明るる年の昭和35年の1月、大阪のある町工場が倒産しまして、修習生の時の数少ない友達が、自分と同じふるさとの人なんだということで私に紹介してくれました。それで大阪の町工場の再建を私がやるようになりました。

何しろ暇なものですから毎日工場へ行きます。工場へ行って見ていると、実は工場の中には旋盤であるとかボーリングとかフライス盤とかカッターとかいろんな機械が並んでいる。私たち自身は、若い方はご経験ないでしょうけれども、私たちは中学校3年から4年生にかけて終戦の前の昭和19年、20年くらいに学徒動員になっていまして、勉強なんてまったくなかったんです。それで私は三菱電機伊丹製作所の工場へ働きに行っていたわけです。そして朝から晩まで工員として働いておまして、旋盤とかフライス盤とかカッターというような私が使い慣れたものが置いてあるわけです。

それで私がそばの人を見ていると、皆さんはご存じの方もありませんけれども、ああ

いうものは芯（しん）出しと言いまして、穴を開けたり削ったりする時、きちんとまっすぐ垂直に置かないと歪みよるわけです。それをきちんと置くことを芯出しと言います。座金をはめたり、垂直にきちんと置かないといけない。それから削ったり穴を開けたりするわけです。この芯出しという作業が非常に面倒だということは自分自身で経験してわかっているわけです。それで工員さんの姿を見ていると、その芯出しの仕事をいい加減にしたまま作業にかかっているわけです。

それで僕が見ている、「あんた、そんな芯出しの不十分な仕方であかんがな」と。すると向こうが「弁護士が何や、これは」という顔をして、僕の顔を見ているんです。それでこれは俺を信用していないなと思って、町工場の左右にはクレーンに上がる梯子がありまして、そこは水道のバルブを作っている会社だったもので鋳物で作っているものもあるんです。それはクレーンで吊り上げて、そこで芯出しをしないとイケない。これは腕でやるよりもっと難しいわけです。私はそれに挑戦して、とんとんと鉄の梯子を上がってクレーンを動かして、芯出しを私がしかかったわけです。

すると工員さんが下から見ていまして、初めて私は尊敬の念というのを見ました。みんなが上を向いて、しかもみんなが尊敬の念をもって見ているということがわかりました。それからです。工員さんに私が「芯出しをちゃんとしいや」と言ったら、ちゃんと芯出しをするようになりました。

すると私が債権者に「今まではうちの店は芯出しの仕方が不十分でして、これから私が仕込んでますからちゃんと芯出しのできる会社になります」ということを言って、債権者の方にも話して、すると社長よりも私の方がよくできるということになって、この会社の再建ができました。

再建ができるだけではなしに、そのときに私の予想もしないことが起きたんです。それはどうということかという、私は先ほどから言うように、孤独で友達もなくて、人に紹介してくれる人もなくて、弁護士して独立してもあかんと言いました。すると100人ほどいらした債権者の方が、私には今まで一面識もない人、何のゆかりもない、その何の一面識もない人が私の仕事の仕方だけを見て、何人かが私の依頼者になって事件を頼みに来てくれるようになったんです。私はそのときに、「あっそうか。なんちゅうことないわ。どんなアホでも何でも大丈夫だ。仕事さえちゃんとできれば依頼者がくる」ということがわかりました。

同時に、ここにも書きましたように、「現場に神宿る」ということを書きました。先ほども言いましたが、ものの考え方の中になぜ、なぜという原因は追求して考えていかないといけない。ということは結果の原因だと思ったことがまた何らかの結果だから、そういうときにはおそらく制度とか組織とか運用とかいう問題はありません。担い手自身の中にあります。担い手の頭の、意識の中にこそありますということをおは言いました。

この会社が倒産したのはなぜだったのか。普通で言えば、利益率が悪いとか売上が少ないとか得意先が少ないとかいろんなことが出てきます。しかしなぜ得意先がそんなに少ないのか、なぜ利益率が悪いのかということ、やはり不良品が多いからです。なぜ不良品が多いのかということ、結局は芯出しの仕方が不十分だから、不良品が多いから結果的に原価が高いついてくるわけです。

なぜそんなに芯出しの仕方が不十分かということ、芯出しをちゃんとやるかどうかということとは、そばから始終見ていなければわかりません。するとボンボン同じような製品を出していたら、どれがダメであったかわからない。すると一人ひとりの工員さんが作業をするときに、ええ加減な

ことをしても誰もわからへんわなと思って、ええ加減な仕方でも個数だけちゃんとあげてしまう仕事の仕方をするという職人としての敗戦気分、これが結局、この会社を倒産させた。工員さんは「給料をくれない」と怒っているけれども、その工員さん自身の頭の中にこそ実は問題点があったわけです。まさに担い手の意識の中に問題点がある。

それをどうして直させるか。私は何も思わずにやったのですけれども、それには自分が一番難しいクレーンを動かして芯出しをするという作業をして、初めて人間というものが付いてくるということを覚えるわけです。私はそのことによって、この現場主義だけは今もどんな事件をやっても、皆さん方もどんなお仕事をなさっても、このことは間違いなく合っていると思います。

現場主義というのは、現実現場に行き行って現物を手に取ることであります。手に取るということは、まさに五官であります。この目で見、この耳で音を聞き、鼻で匂いをかぎ、舌で物を味わい、手触りを見る。すなわち手触りを見るというのは自分でやってみるということなんです。そうすることがまず現場主義ということでもあります。

そして第六官、先ほど言うように、なぜだと。なぜという言葉がどうしてもいるわけです。なぜと考えてこそ初めて、神が発見できると思うのであります。神様に従い、作戦の作り方を実践する。「説得と勘は現場の体験から」ということを書いています。

私も皆さん方も、どこに行かれても何の仕事にしても、仲間を作るにしても相手方にしても、私だったら裁判をやりましても、人を説得するという作業が一番必要であります。すると人の説得というのはどうしてできるかということでもあります。

私はこれには現場主義に基づく現場の体験が絶対に要すると思うのであります。なぜ現場の体験がこれほど要するかと言いますと、これは2つの方向から考えないといけないと思うのでありますけれども、1つはものを言う側なんです。ものを言う側が現場の体験に基づいて物を言いますと、自分の頭の中に現場の体験をしたものが思い出されますから、まるで写真機のように、自分の頭の中の写真機に写っているものをその通りに言えば、言っているものにどこか迫力が付いてくるんです。

先ほど言いますように工場の左右の壁に付けてある梯子を上がってクレーンを動かしましたと言いましたときには、私は皆さんにお話をしている時も町工場の風景がそのまま私の頭に残っております。残ったままを言っておれば、どこか言っていることに迫力があるんです。私が裁判に負けない弁護士に育ってきたというのは、相手方の代理人とか裁判官を説得しているわけです。それはなぜか。私がどんな事件であっても現場に行きます。そして現場に基づいてものを言いますと、どこか言っていることに迫力があるんです。それがまずもって人を説得する力の1つではないかと思うんです。

2つ目には、今度は聞く側の方も考えないといけないと思います。聞く側というのを考えてみましたときに、だいたい人は似たものだと思うんです。私もなるほど人を見てみました。確かに男前とか美女もいはります。しかしながら、目が上にあって、鼻が真ん中にあって、口が下、この位置が違うという人にお目にかかったことはないです。結局、そんな人はいないんです。だからこそ歴史が大事なんです。

歴史の文脈の中でもものごとを見ないといけないというのは、みんな人は似通ったものですから、同じようなことをやるんです。今になって突然起きてきたような問題は実はないんです。そ

う意味において、人は似通ったものなんです。そうすると今度は聞く側も、体験というのもだいたい似通った体験があるんです。そのものの体験がなくても。

そうすると人が納得するというのは、自分のした体験に照らしてみても、「そうか、ああいうことだあってあり得るな」ということが、初めて人が納得をすること、いわゆる説得ができることになるわけです。だから我々が現場の体験に基づいてものを言わないといけないうのは、そういうことにおいて説得という作用の中でもそうだろうと思うんです。

もっと重要なことは勘なんです。実はどんな世の中のことでありましても、先は見えないものであります。どんなことを言っても、この次は景気がどうなるか、小泉さんが言ったらこうなるとかいろいろ言うけれども、経済学者もいろいろ言う。けれども、あんなのが合っているためしがないと私は思うんです。私も株を買ってみました。しかし、ほんまにうまいこと得したということはまずないです。ということは、だいたい先は見えないとはっきり諦めるほうがいいと思います。

ところが困ったことに、最大の困ったことは、時が人を待たない。8月31日の午後何時何分といったその時間だけは、刻々と進んでいったら二度と帰らない。時が人を待ってくれない。だから先は見えないのに時が人を待ってくれないから、やむなく私たちは右左を判断して動かざるを得ないわけです。そのときの羅針盤とは一体何かというわけです。これはやはり自分が持っている勘なんです。

勘というのは、生まれながらにして、先ほどの能力と同じですが、決して親からもらうものではありません。また学校で習うものでもないです。勘という能力も、実は自分で作るものです。先ほど言いますように、どんなことでもいいんです。実は「なぜ、なぜ」とさえ考えていただいたら、なぜこうなったか、なぜ今日の中坊さんの話を聞きにいったのかなとか、今日の昼になんでラーメンを食ったのかなと考えてみたら、何か理由があるはずなんです。そんなことは正直言ってもいいので、すぐに忘れたらいいんです。

ところが、なぜだと考えてさえおりましたら、その答えはすぐに忘れますけれども、時間の中に実はずっと逡巡していつているんです。そして噴水のように、温泉がバーッと出てくるみたいに、温泉のように吹き出てくるもの、これが実は勘なんです。だから勘によってこそ初めて人生というものが安全に動いていけるのではないかと、このような感じを持っているわけでありました。

その後、庶民の中にこそ人間愛があるということとその後も私は33歳くらいになって丸和百貨という市場の事件等でみます。しかし私にとって決定的に重要となりましたのは、4で書き出した「虚弱児の生き方(その3)ー遅すぎた私の青春」ということであります。

4 虚弱児の生き方(その3)ー遅すぎた私の青春

私が1973(昭和48)年、私は43歳になっておりました。しかしそのときに「遅すぎた私の青春」と書き出したように、森永ミルク中毒事件の被害者弁護団に参加したことであります。

森永ミルク中毒事件というのは、皆さまご承知のように昭和30年、1955年に森永乳業徳島工場で作っていた赤ちゃんが飲む唯一の食料である粉ミルクの中にヒ素が混入していた、そのために1万数千人の赤ちゃんがヒ素中毒にかかり、200人の人が死亡するという大事件になった事件であります。しかもこの事件は一旦治ったと言われていたけれども、どっこい、良くなっていな

いということが14年目の訪問で明らかになって、昭和48年に我々がまた裁判を提起することになったわけであります。

私は弁護団長に就任したわけでありますけれども、私がこの記録を見せてもらいましたときに、ここにも書きましたように「父の一言」ということがございます。実は私自身はこの弁護団に参加してくれと同じ仲間の弁護士に頼まれました。記録も見ました。なるほど大変な事件だと思いました。しかし、私には大きなためらいがありました。

それは2つありまして、1つは私も先ほどから言うように、なんぼ依頼者がいるといっても、私も人にあちこち広がるような依頼者もない。私の依頼者というのは企業であるとか公共団体であるとか、そういうものが多ございました。ところが今度は森永とか国を相手どるということは、自分の依頼者と同じような人を今度は相手にする。すると中坊さんはどっちの味方かいなと疑われないかと思ったことが1つであります。

もう1つは、あの時分、アカ、アカと、アカ攻撃が大変な時代でありました。この弁護団が、その時分に司法のアカだと言われていた青年法律協会に所属している弁護士が多かったわけであります。私自身はアカでもないのにアカだと言われたら、それだけで社会から抹殺されるぞと思いました。

それで私はちょっと考えまして、記録は見たけれども受けるのは断らないといけない。断るために何かいい口実がないか、父を利用してやれと思ひまして、父を利用したら「それはそうや。公平、つまらんことに人におだてられて妙なことをすな」と保守的な父なら言ってくれるだろうと私はそのように思ひまして、父にこんな話があるんやけどどうやろうと相談しました。

そうしたときの父の言葉はまったく私にとって予想外の言葉でした。父がまず言いましたことは、私の話を聞き終わるやいなや、「公平、お父ちゃんは公平をそんな情けない子に育てた覚えはないぞ。そもそもお前は考えてみい。子ども、赤ちゃんに対する犯罪に、お前は右も左もあると思うのか。お前は小さいときから出来の悪い子やった。そやけどとにかく前には自分で行けるようになった。しかしほんまの意味で人様のお役に立ったことがあるのか。お前みたいなもんで人様のお役に立つと言われて、それでも、なお、ためらってお父ちゃんに相談に来る。そんな情けない子にお父ちゃんは育てた覚えは無い」と、父親が言い放ちました。

実は父親は昭和51年、ですからその3年後にはこの世からいなくなっております。父が残した最後の言葉がその言葉であったわけです。私は突き飛ばされるようにして弁護団に参加したものであります。

同時に、弁護団に参加しまして、「被害者訪問の動機」というのを書きました。私はそれに行きますと、非常に長い間ヒ素ミルクを飲んでいて、そのためにこんなに大きな後遺症があるのはわかるのですけれども、中には10日とか20日くらいしか飲んでいないのにもものすごく大きな後遺症が残っている子どもがいました。私は「ほんまかいな」と思ひました。

私はほんまかいなと思ひますけれども、今でもそうですが、私は正義感の量が少ないから、そのうちにこんな事件をやっていたら正義感の量が出てくるだろうと思ひましたけれども、なんぼやっても正義感の量は出てきません。ますます逆に疑いが多くなるものです。

その時のはっと自分で考えたら、そうだ、俺がうまいこと世の中で生きている手立てを覚えたというのは現場主義やなかったかと。なるほど僕はこのような集会で多くの被害者の方に会いま

した。時には被害者の家にも訪問しました。しかし、ほんまの意味で被害者の方と1回でも一夜でも共にしたことがあるだろうか。家に泊めていただいてゆっくり話を聞いたことがあるだろうかと私は考えました。いや、これじゃ俺は被害者のことを知っているとは言えない。

だから私は50数名の原告の方々を中心といたしまして、それから休日と土曜日の午後全部を割いて、実は私は被害者訪問というのを始めたのであります。

そして、その現場で見たもの、これはあまりにも私が常識で考えていたことと違いました。まずもって私自身はああいう被害者の家に行って、本音でお父さんお母さんとお話をすれば、多くのお父さんお母さんというのは、あの昭和30年当時、どれほど森永や国がひどいことをしたのかということの縷々を私たちに言うてくるのではないかと、言われるんじゃないかと思っていました。あの時分は補償金も現金書留で当時の森永乳業は送り届けたものなんです。その冷たさといったようなものを私は訴えてこられるのではないかと思って、被害者の多くを訪ねました。

しかし、誰一人と言っていいくらい、集会では「森永や国はけしからん」とやっているのですけれども、実際に家に行ったら誰一人と言っていいくらい、森永の悪口も国の悪口も出てこないものであります。

それではお父さんお母さんは何を私たちに訴えられるかということでありまして、一番多いのはお母さんでありまして、「先生、そもそも乳の出ない女が母親になったのが間違いでしたわ」とか、あるいは「1歳に満たない子どもが、今思うと毒入りミルクを口に含ませようと思ったらずで払った。手で払ったときになぜ、このミルクはおかしいと自分は気がつかずなかつたのでしょうか」と言われるんです。

「そんなことを言ったって、ヒ素が入っているからと言って匂いも味も変わらへんのやし、いわんや1歳に満たない子どもが手で払うわけがないでしょう」と言っても、「いえ、そのことに気がついてミルクをやめてお粥に替えた人がいはる。その人は軽症で済んでるんですわ。それに気がつかずなかつた私が悪い」。

あるいは、少し値段の高い粉ミルクにはたまたまヒ素が入っていなかった。そうするとお父さんお母さんがおっしゃるのには、「先生、子どもに物を買うときに、上等と安物がある。そのときに安物を買う。この親の私の根性が間違っていました。そのために一生自分たちがどんなひどい目に遭おうが、やはり悪かつたのは自分です」とおっしゃるわけです。そのすべての言葉の中に全部統一されているのは、自分を責めているだけなんです。

私はなぜこんなに、私らだつて森永と国が悪いと裁判を起こしているのに、何で自分が悪いと責めるのだと私は考えました。そしてハッと自分でわかりました。実はこの人たちは、もう救済なんて有り得ない。なんぼ裁判を起こしても、金1000万円の損害賠償を請求しようがどうしようが、病気になつたこの子は二度と良くなれないということはよくわかっている。そしたら自分を責めていることが実は救済なんです。私は救済というのはこんな姿であるのだということその時に切実に思うわけです。

あるいは、小西タケオ君という子がおりました。これは17歳でてんかんの発作を繰り返しながら亡くなっていきました。そのお母さんに「あんたはこんな子どもをお育てになって、いろいろ悲しいことや苦しいことがあつたでしょう。何が一番悲しいことですか」とお母さんに聞いたことがあります。

そしたらお母さんのおっしゃるのには、まったく予想もつかない言葉から出発しました。「先生、実はうちのタケオは生涯3つの言葉しか言えなかったんです。1つは『おかあ』、2つ目は『マンマ』、3つ目は『アホウ』という言葉です。どんだけうちのタケオがダメであっても、『お母さん』と『ご飯』だけは教えないとダメだと思って、私は一生懸命になって2つの言葉を教えました。しかし、『アホウ』ということは私はただの1回も自分の子どもに言ったことがありません。しかしこの子が覚えた3つ目の言葉が実は『アホウ』という言葉なんです。先生、何が憎い、何が悲しいと聞かれましたら、世間が憎い、世間の冷たさこそが私にとっては憎い」と言われたことを思い出すわけであります。

私はこのようにして、被害というのはどのように横たわっているのかということがわかります。私たちが不用意に言うアホウという言葉が一体何を意味するかということもわかってきます。私はそのようにして初めて世の中というものはもっと高い理念から根本的にものを考えないといけない。私たちが起こす裁判とは一体何であるのか。法とは何なんだ、私はそれなりに自分で、なぜ、なぜ、なぜと考えるようになってくるわけであります。

5 おわりに

終わりのところになりますけれども、「あらためて知る自立と自律—タテの公よりヨコの公」と書きました。私たちに今何が欠けているのか。教育をする子どもに欠けているのではなしに、実は教育する我々自身に欠けているのではありませんかと私は聞きたいと思うのであります。

そのどこが欠けているのかと言いますと、自分の足で立つ自立ということがないわけであります。自立のためには、まず「なぜだ」と考えることから物事を始めなければいけないと思えます。

そして自律、もう1つは自分を律するというのであります。欲望のままにいったとしても、世の中は決して幸せというのはやってこない。まさに必要なことは、「タテの公よりヨコの公」。公という字は決して官を意味しないわけであります。公園であるとか公道というのはすべて「みんなの」という意味であります。私たちはまさにみんなのために何ができるのかを一人ひとりが考えることが教育のもっとも基本ではないかと思うわけであります。

最後に書きましたように、「一燈照隅、万燈照国」と書きました。私自身は所詮、最澄が比叡山延暦寺で書きましたように、人間はなんぼ頑張ってみても1つの燈火は1つの隅しか照らせない。我々の力にはものすごい限度があります。しかしながら、同時に私は万燈照国と言いたいと思うのであります。もし日本国民の一人ひとりが火を灯せばこの国も明るくなる、わが国の21世紀もこうして明るくなるのではないかと思うわけであります。

時間がまいりましたので、これで終わらせていただきたいと思えます。ご清聴どうもありがとうございました。

金ではなく鉄として —私の生い立ちから—

1 朝日新聞の「金ではなく鉄として」の連載はどうしてはじまったか — イレギュラー人間

○イレギュラー人間としての考え方

How 文化から Why 文化へ 高い理念から現場を直視

「なぜ」こうなった（結果→原因へ）を考える 順次原因を追う

担い手の意識のなかに問題あり ヒントとは歴史と諺

○イレギュラー人間の行動の仕方

着手先行型を排して理念先行型へ 改良のさきに改革はない

そして戦略（準備 仲間 見取図 公約 見通しのないまま実践へ そして継続）戦術（現地の指揮官 自ら退路をたつ 部下の肩車に乗らな 柔軟性—逆風下には間切る）

2 虚弱児の生き方(その一) — 鉄の育て方

○虚弱児に生れて

孤独と劣等感 金メッキせず 安堵感こそが原点（両親） 意欲

自分の本能に気付く 入試合格方法をつくる 学問は駄目 能力は自分で創る

○しあわせは心の中に

このことを悟った18才の記憶 しあわせは外的条件とは関係ない

しあわせの枠は自分の心でどのようにもつくれる 知足最富

○結婚

夫婦愛は戦友愛 弱いもの同士の結婚 両親の反対 両親との経済上の決別

やっと分ってくれた父「公平にとっては日本一の嫁でした」

3 虚弱児の生き方(その二) — 現場主義

○現場主義を体得

依頼者がいない 町工場の再建 現場に神宿る（芯出し） 生きる手だてを覚える

○現場主義

現実に現場へ行って現物を手にとる（五官と六官） 神の発見

神に従い作戦をつくり実行 説得と勘は現場の体験から

○庶民のなかにこそ人間愛がある

丸和百貨の新幹線工事差止め事件 実力行使の意味と限界 人生決した時 探偵ごっこが生きる

リーダーの条件 リーダーも老いる

4 虚弱児の生き方(その三) — 遅すぎた私の青春

- 現森永ミルク中毒被害者弁護団に参加して
父の一言
- 被害者訪問の動機と訪問して分ったこと
- 被害者と同じ目線で見ることのできない困難性
心にひそむ驕り
- 自分の職場からその根本を考える
私の青春(同苦の人間として) 提起している裁判と被害者救済 法とは何か 裁判の本質
は何か

5 おわりに

- あらためて知る自立と自律
タテの公よりヨコの公
- 一燈照隅、万燈照国